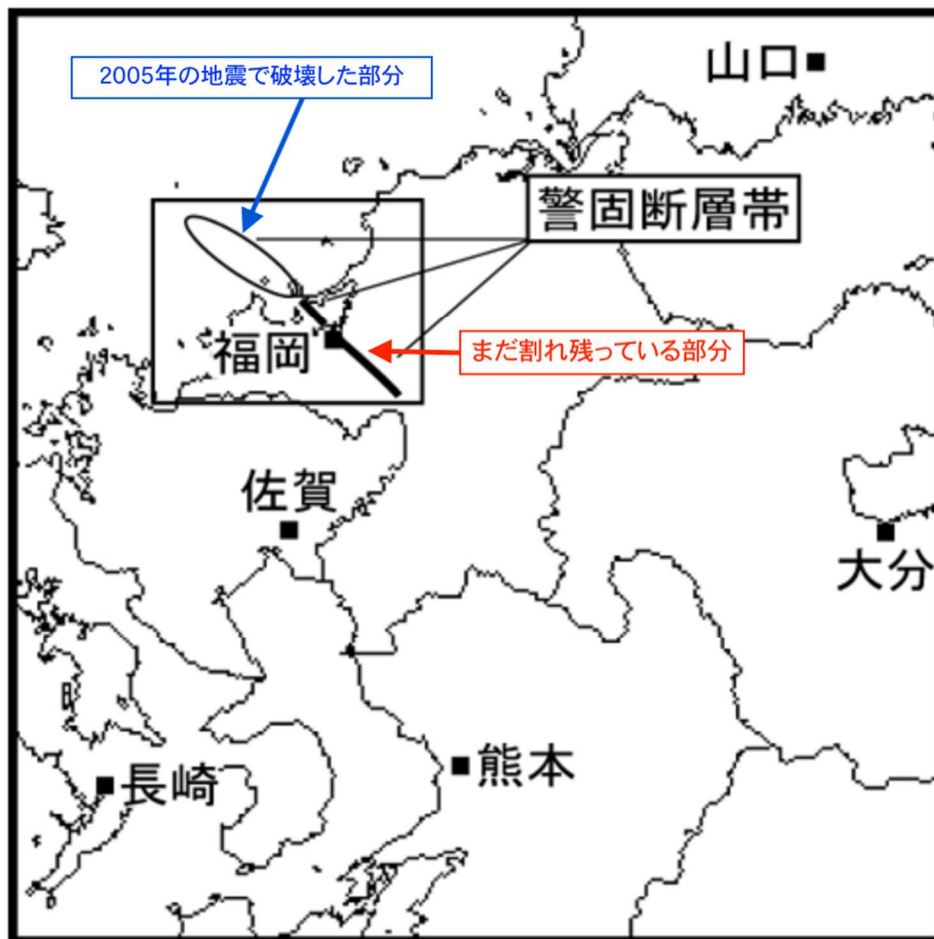


## 九州北部(警固断層)で地震活動が少し活発化しています

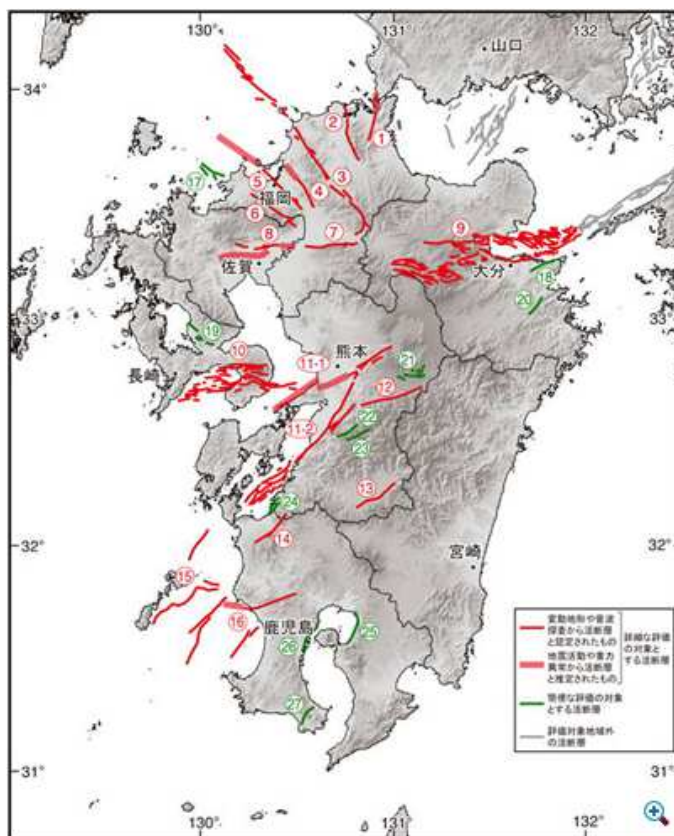
警固断層は2005年3月に福岡県西方沖地震(マグニチュード7.0)を発生させた活断層です。この地震では、震源に近かった福岡県西区の玄界島で住宅の半数あまりが全壊する被害が発生しました。



政府・地震調査本部の報告の図に加筆

この地震は警固断層の北西部分が破壊したものと考えられています。従いまして地震学的には、福岡市街地部分の警固断層は、まだ破壊しておらず、今後大きな地震発生の可能性が最も高い活断層の一つと考えられています。

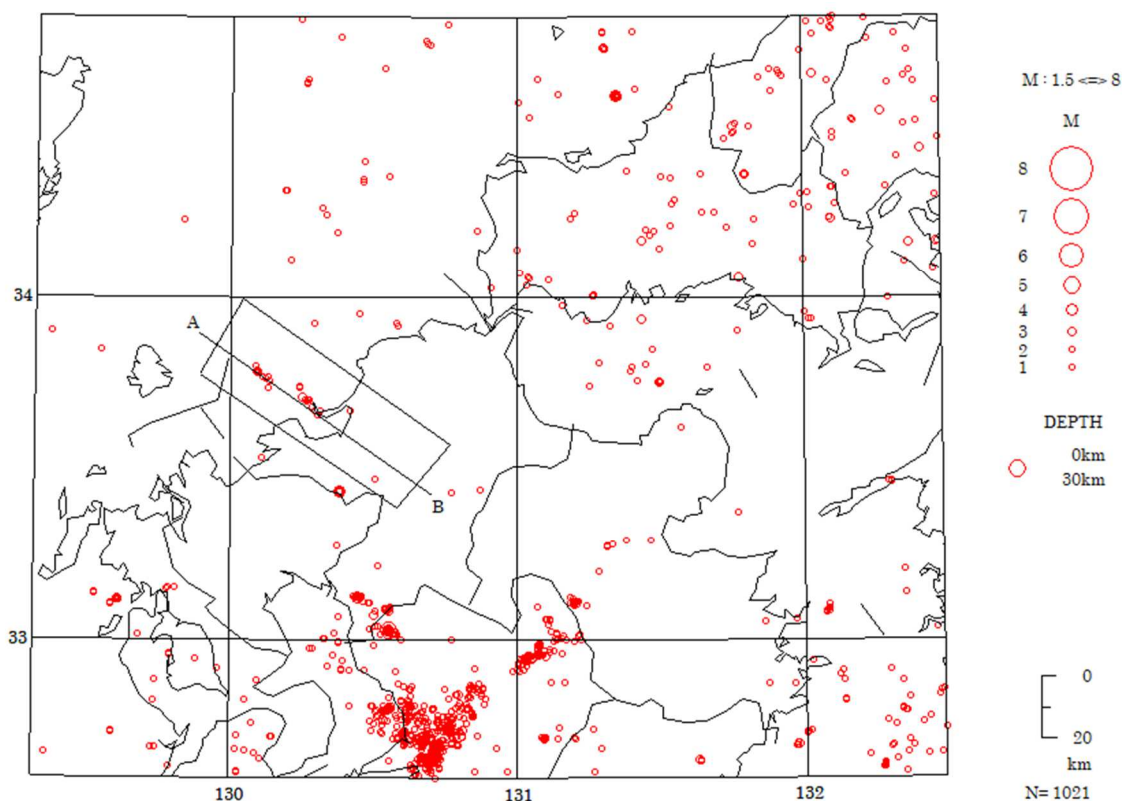
さらに九州北部には、次の図の⑤の警固断層だけでなく、①の小倉東断層、②の福智山断層帯、③の西山断層帯、④の宇美断層といった活断層が確認されており、地震発生の頻度分布の解析(グリーンベルク・リヒターの**b**値解析といいます)からもこれらの断層では、すでに大地震発生の条件が整っている可能性の高い結果が出ています。

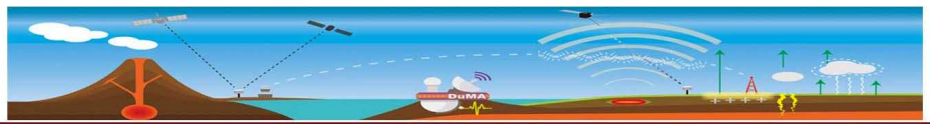


政府・地震調査本部の報告による九州地方の活断層

[https://www.jishin.go.jp/evaluation/long\\_term\\_evaluation/regional\\_evaluation/kyushu-detail/](https://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/regional_evaluation/kyushu-detail/)

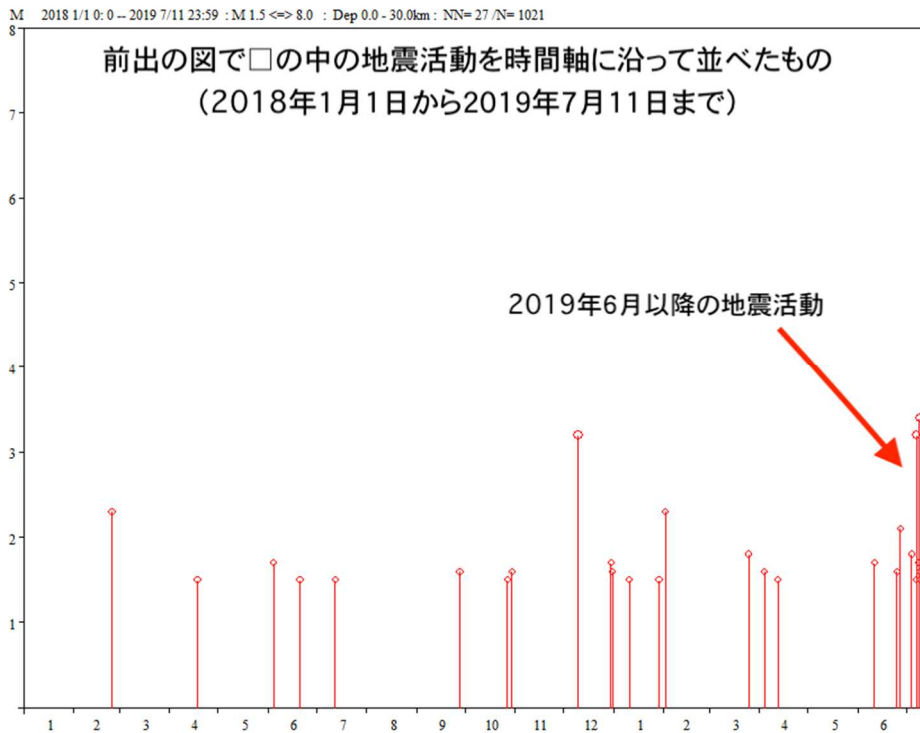
次の図は、2018年1月から2019年7月11日までの九州北部の地震活動です。





図中の□で囲った地域が警固断層の位置となります。線状に地震が発生している事が確認できます。この線状の地震活動は2005年の福岡県西方沖地震の余震活動です。

ただ、この2019年6月下旬から、少しこの地域の地震活動が活発化している事がわかりました。



もちろん地震活動の活発化がすぐに大地震に繋がる事は少ないのですが、もともと、地震発生の可能性が高くなっているとこれまで再三にわたりニュースレターで報告させて頂いている九州北部地域での活動です。皆様も九州北部へご旅行される場合には、「格式の高い」ホテルもちろん結構ですが、ぜひ「新しい」ホテル(=新耐震基準満たしている)にご宿泊されますようお願い申し上げます。次週のニュースレターでは、九州北部の地震活動について詳しく解析結果を報告させて頂きます。

## 東北地方海域の地下天気図®

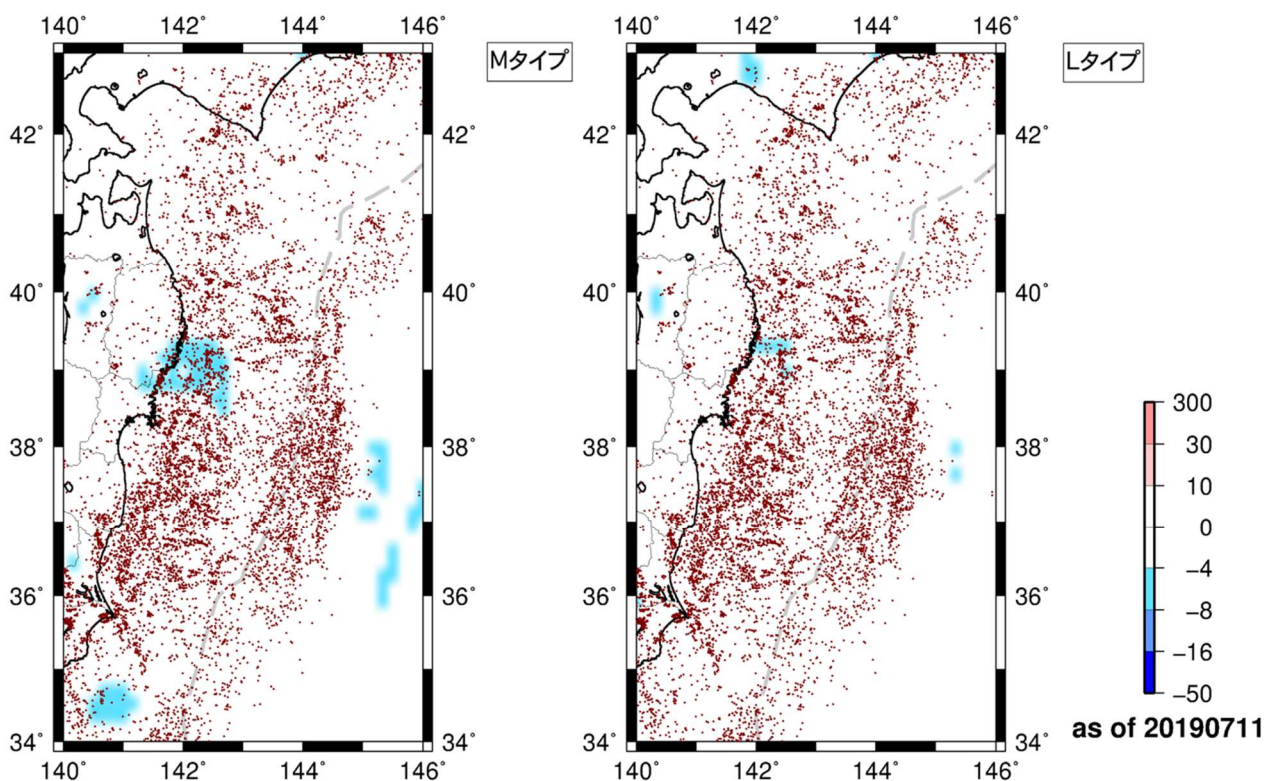
6月3日のニュースレターに引き続き、東北地方沖合の海域で発生するマグニチュード7クラスの地震に特化した解析です。次に示します地下天気図は7月11日時点のMタイプ(左側)とLタイプ(右側)です。

図中の茶色の点は2011年夏以降の解析に使用したすべての地震の発生位置です(震央)。6月3日の段階から、少し状況が変化している事がわかりました。最も目立つのはMタイプにおける岩手県すぐ沖の地震活動静穏化です。ただしLタイプではまだ顕著な異常とはなっていません。

地下天気図の特徴として、Mタイプのアルゴリズムは地震活動静穏化の抽出能力には優れるのですが、狼少年となる可能性も存在します。それに対し、Lタイプのアルゴリズムは狼少年になる可能性は小さいものの、静穏化を見逃す可能性はMタイプより大きいという特徴があります。



したがいまして M タイプ、L タイプ同時に異常が抽出された場合には DuMA では最も重要な静穏化と  
考えております。



DuMA では東北沖につきましては、岩手県海岸すぐ沖の静穏化の推移に注目していきたいと思いま  
す。